

「小さな親切」運動静岡県本部賞

笑顔

浜松市立白脇小学校 六年

市野 七美



「おねえちゃん大丈夫。」私は、ドキッとしました。それは私が、外で二重とびの練習をしている時のこと。思うように回数が伸びないので、つかれて座っていたら、小さな女の子に声をかけられたのだ。私が何も言わないので、その子はもう一度、私にこう言った。「どこか痛いの。」私は、笑ってごまかしてしまっただ。でもその子は、私が笑ったからなのか「よかったあ。」と言った。私は、とっさに何を言えればいいか分からなくて、笑ってごまかしたただけだったのに、その子は、すぐくうれしそうな顔で

ニコッと笑って帰っていった。
私は、集合住宅に住んでいるので、私たち家族以外にも色々な人が住んでいる。その子も、最近引っこしてきた家族の一人だ。違う国の人も住んでいれば、他県から仕事できているだけの人もいるらしい。でも私とは、時間帯が違う人達ばかりであり会うことがない。それでも母は、たとえ関わりがなくても会った時は、あいさつをしてよと、いつも言う。だからというわけではないけど、会えばあいさつをするようにしていた。で

も私は、母の言葉に少し不満を感じていた。なぜなら、私がいさつしても、ほとんどの人が素通りしていくからだ。頭も下げてくれない。だからいつのころからか、私はいさつをしなくなってしまう。

でも、その子は違っていた。誰かがいれば、大きな声であいさつしていく。誰もふり向かなくても、ニコニコ笑顔で、小さな体をさらに小さく丸めて頭を下げる姿はともかわい。見ている私の心はなんだか温かい。あの時も、そんな気持ちだった。「おねえちゃん大丈夫。」私には、兄弟がいない。だから、おねえちゃんって言われた時、本当はうれしかった。なんでもない一言だったかもしれないけど、私を幸せな気持ちにしてくれた。

なんでもない言葉や、日常のあいさつ一つにも、人が幸せな気持ちになれることはたくさんあるのだと思う。たとえ言葉がなくても、笑顔だけで人の心を明るくすることもできる。

けど人は誰でも、いやな気持ちや悩み事などを持っているはずだ。その気持ちが大きくなると、自分の事しか考えなくなつて、人への思いやりの気持ちがあうすれてしまうのだと思う。なぜなら、私もその一人だと思ったからだ。あの時、女の子に何も言えなかったこと。あいさつしても返してくれないからと、やめてしまったこと。結局、自分の事しか考えていなかったこ

とを反省した。また、あいさつは関わりがなくてもという、母の言葉に今は不満を感じていない。関わりがないからこそ、あいさつやちょとした声かけが大切なんだと思えたからだ。それが人とのつながりや、幸せな気持ちを広めていくのだ。まずは、人の言葉や行動をいやだと思ふより、笑顔でいることを心がけたいと思った。

